

「米欧回覧実記」教育関連項目集成

—岩倉使節団の教育施設訪問の検討—

村瀬 勉
田中 萬年

1. はじめに

1853年のペリー来航以来、日米間の和親修交通商条約が調印され、その批准等のために徳川幕府は使節を派遣してきた（尾佐竹 猛 1989、田中 彰、1991、宮永 孝 2005）（表1）。明治維新政府は、1868（明治元）年1月、幕末の条約を継承したが、条約改正の意図を宣言し、遣外使節団問題は翌年の1869年からあった。この条約の改正協議期限は1872年7月1日（明治5年5月26日補足1）である。

1871年12月23日（明治4年11月12日）遣欧米特命全権大使岩倉具視一行は横浜港を出発し、1873（明治6）年9月13日横浜港に帰着するまでの約1年10ヶ月の間に米欧の著名な都市を回覧、視察を行った。米欧の教

育に関しては、表1に示した他の使節団による視察が既にあるが（石附 実 1985）、組織的な視察は岩倉使節団が初めてである。使節団派遣の目的は次の三つである（森谷秀亮 1939 p.961）。

- (1) 締盟各国を歴訪して其の元首に我が国書を奉呈し、聘問の礼を修めんとしたこと、
- (2) 廃藩置県の断行に依り維新鴻業も漸く完成せんとし、今後は内政の整備に力を注ぐ要があったので、欧米先進国の文物を親しく見聞し、其の長を探って我が国を近代国家化せんとしたこと、
- (3) 近く条約改正を為し得べき年限に達するので、先ず我が希望とするところのものに就いて、締盟国政府と商議を重ねんとしたこと。

表1. 岩倉使節団派遣までの徳川幕府海外派遣使節関連 日付は陽曆（陰暦）
Table 1. Time table of Japan's diplomacy toward the western countries in 1853-71.

1853/7/8（嘉永6年6月3日）	ペリー来航、開国要求
1854/3/31（嘉永7年3月3日）	ペリー再来航、日米和親条約調印
1856（安政3年7月）	ハリス着任、通商条約交渉要求
1858/4/27（安政5年3月14日）	岩倉具視（当時、孝明天皇の近侍）意見書「神州萬歳堅策」を提出し、米国との通商条約締結の必要を認めるも、その前に欧米諸国に調査団を派遣すべきと提案（構成は、朝廷より2名、幕府より大名2名、国府大名より各2名、大小名より各2名、隨従の士僕）
1858/7/29（安政5年6月19日）	日米修好通商条約調印
1860（万延元）年	遣米使節新見正興一行、日米修好通商条約批准書の交換
1861（文久2）年	遣欧使節竹内保徳一行、開市開港実施の延期要請等
1863（文久3）年	遣仏使節池田長発一行、横浜鎖港談判、パリ約定調印（のち破棄）
1865（慶応元）年	遣仏使節柴田剛中一行、製鉄所建設のための諸準備
1866（慶応2）年	遣露使節小出秀美一行、樺太における日露国境問題
1867（慶応3）年	遣仏使節徳川昭武一行、パリ博覧会への参列等
1871（明治4）年	岩倉使節団、条約締結国に国書提出、条約改正の交渉、西洋文明調査

1869年6月11日（明治2年5月2日）の、フルベッキによる大隈重信宛の意見書「ブリーフ・スケッチ」（田中 彰 1991, p.355）に始まる欧米視察団派遣の経緯については、既に多くの研究がある（例えば、田中 彰 1977-82 pp.398-405. 補足2）。さらに遡れば、表1にある通り、既に1858年に岩倉は、「神州萬歳堅策」（補足3）において米国との通商条約締結の必要性を認めつつも、締結前に欧米諸国への調査団派遣を提案している（泉 三郎 2004 p.14）。このことは、大隈使節団計画から岩倉使節団への切りかえに対する岩倉の先見性とこだわりを思わせるものである。

岩倉使節団は、その視察において何を見、何を得、何を考えたのであろうか（田中 彰 2003a）。本稿で扱う教育視察の内容に関しては、石附 実（1978 p.4、1985 pp.197-225）は、「教育視察のことは、すでにさきのフルベッキの提案（ブリーフ・スケッチ）の中にも含まれていた。～また、派遣の正式調査事項を掲げるいわゆる「事由書」にも教育の項があり、～（大久保 1976）。これをうけて～文部省理事官田中不二麿の調査予定内容も、大筋は～ほぼ同じであるが、もう少し具体的になっている」と述べている（補足4）。

本稿は、岩倉使節団の報告書の「特命全権大使米歐回覧実記」から「教育教育関連項目」を集成し、特に訪問した教育関連施設について検討するものである。

2. 「回覧実記」と「理事功程」

岩倉使節団の回覧・視察の結果は、次の2つの著作によって報告された。

1) 「特命全権大使米歐回覧実記」5編100巻（岩倉使節団大使隨行・権少外史久米邦武編修・田中 彰 校注（1977-1982）、以後「回覧実記」と略記）。

この「回覧実記」に関しては多くの研究成果があり（田中 彰 2002）、その性格と叙述については、編者久米邦武自身が、例言で「本編ハ大使公務ノ余、及ヒ各地回歴ノ途上ニ於テ總テ覧觀セル実況ヲ筆記ス、是ヲ以テ回覧実記ト名ク、故ニ使節ノ本領タル、交際ノ応酬、政治ノ廉訪ハ、反テ之ヲ略ス、別ニ詳細ノ書アレハナリ」と述べている。

2) 「理事功程」。これは使節団に随行した各省からの専門別調査官「理事官」が、使節団が関連した書類等を編纂記録・文書類であり報告書である。その一つが、上記の「別ニ詳細ノ書」、すなわち、教育に関する文部省「理事功程」（1873-1875 明治六年十二月～八年九月）である。これは新島 裏に負うところが大

きいが、文部大丞田中不二麿が理事官として随行、歐米の制度を視察、帰朝後上梓したもので、わが国で初の公的な海外教育調査報告書である（「理事功程」1974復刻版の小林哲也解説）（補足5、6）。

理事官の業務としては、「使命公務ノ文書ヲ纂メ、大使書類、公署日記、謁見式等ヲ編成シ、又同時派出ノ各省理事官ハ、各国政教兵備ノ底細ヲ視察廉訪シ、報告ノ書、数大部ヲ」作成し（回覧実記（一）例言 p. 9）、「（イ）制度・法律の理論と実際、（ロ）理財・会計（諸産業をふくむ）にかんする法規と方法、およびその現況、（ハ）各国教育の諸法規と実情の調査などに重点をおくことをさだめ、その視察対象をもあげ、それぞれの担当者が執筆を分担している」のである（田中 彰 2003b p.250）。

「回覧実記」と「理事功程」の内容を石附 実（1978）が次のように比較している。

「『功程』の内容は、～欧米教育を法制的な側面から明らかに紹介するという、たぶんに翻訳による間接的情報の集積としての性格が濃い。それに対して、「回覧実記」は、～日記式の巡歴実況記録を主体として、筆録者による論評や書簡の記事も含まれる、なまの直裁的な観察報告書である。」

一方、細目に関して云えば、久米自身が、「各理事官ノ理事功程中ヨリ抄録シ（①p.15）」と述べているように類似点が多い。一例を「回覧実記」第二巻米利堅合衆国ノ総説と「理事功程」卷之一における教育に関する部分を表2に取り出す。両者を比較検討すると、全体の趣旨は同じであり、特に、太文字の部分は殆ど同じ文章で、「回覧実記」の記事が「理事功程」から抄録されていることが分かる。

わが国の近代的教育制度は、欧米の教育制度が移入されて江戸末期の教育関係の機関が整備され、学制の公布（明治5年）、教育令の制定（明治12年）にいたったことに始まるといわれている。この教育令の制定の立案には「回覧実記」と「理事功程」が重要な資料となり、文教制度の樹立に大きな歴史的意義を持つことになったのである。

3. 百科事典としての「回覧実記」

「回覧実記」の評価については、「回覧実記」の分析から岩倉使節団ないしは明治維新リーダーたちの对外観を見ようという立場、明治初期知識人としての久米邦武の西洋体験に収斂させてしまう立場、「回覧実記」が公式報告書か否かについてなどの研究がある（西川長夫 1993、西川長夫・松宮秀治 1995）。

表2 「回覧実記」と「理事功程」の内容の比較
Table 2. Comparison between Kairan-Jikki and Riji-Koutei.

1977年「特命全権大使米欧回覧実記」(岩波文庫)	1875年全15巻和装本(1974復刻版臨川書店)
第二巻 米利堅合衆国ノ総説	理事功程卷之一合衆国教育略記
○教育ノ方法ハ、大政府ヨリ格別ニ注意セス、各州ノ自定ニ任ス、各州ノ政府ニ於テハ、之ヲ民政中ノ一大事務トナシ、毎年州ノ議院ニ於テ、学税ヲ議定シ、且積金ヲ大ニスル方法ヲ吟味シ、建校勸学職制等、ミナ州々ニテ思ヒ思ニ其周備ヲ競フ、故ニ全国一規ノ学制ハアラサルナリ、但其大要ハ、合衆国ノ本領ニヨリ、人民ノ意ニ任せ、	合衆国教育ハ～國中一般ニ行ハル、一定ノ通法ナシ学費取立学校設備ヨリ学事職制等ニ至リ各州其自定スルニ任ス故ニ各州ノ政府ハ普通教育ヲ以テ民政ノ一大事務トナシ毎年議事局ニ於テ学費ヲ支給スペキ地方ノ税額ヲ議定シ～当今教育ノ実形ヲ概見スルニ各州其法制ニ至テハ大同小異アリト雖モ其旨ヲ要スルニ合衆国体ハ人民ノ意ニ從テ政ヲナス者ナレハ務テ国民ノ知識ヲ開導シテ高尚ニ趣カシムルコソ益其國体ヲ堅フルノ基ト云フニ外ナラス蓋シ学法ヲ設ルノ意タル嚴ヲ以テ迫ランヨリハ寧ロ寛ニシテ各自ヲ奮起セシムルニ如カスト故ニ麻沙朱色(マサチュセット)一州ヲ除ケハ欧羅巴各国ノ如ク父兄タル者ヲシテ必ス其子弟ヲ学校ニ出スヘク督促スル厳法ヲ用ヒスト雖モ人々亦不学ニシテ人ノ下ニ居ルヲ恥テ敢テ自ラ怠ラス是乃チ合衆国一種ノ習俗ニシテ實ニ民心ヲ以テ学法トスル者ナリ試ミニ見ヨ如何ナル下賤ノ民ト雖モ筆読算ヲ能クセザル者其数甚タナルヲ但シ麻沙朱色ニ於テハ七歳ヨリ十六歳マデノ童兒アリテ若シ学校ニ出サヘハ其父母ヨリ二十弗ヲ越エザル罰金ヲ收メシムル事千八百六十三年以来ノ法ナリ～
人々自ラ奮發セシムルヲ旨トス、故ニ歐洲ノ如ク父兄ヲ督責シ強テ嚴法ヲ以テ迫リ、子弟ノ入学ヲ促スコトナレトモ、人ミナ不学ヲ恥テ、自怠ラサルハ、合衆国ノ氣習ニテ、自由寛政ノ実行ト謂ヘシ、	歐羅巴洲ヨリ移住ノ人民亞米利加洲ニ土著セシハ教育ノ旨趣總テ猶本国ニテアリシモノ方法ト異ナル事ナシ西班牙人ノ移リタルシントオーゴスチン英人ノ移リタルゼームストン世ニ巡礼者ト称スル新家ノ移リタルプレモンス等ニ關涉セル諸件ヲ見テ知ルヘシ大抵一家ノ民族或ハ僧徒ノ内ヨリ選挙シタル総代人主宰トナリテ教育ヲ司レリ独リ新英國ノ如キハ是ト異ニシテ教育ノ權ヲ僧徒平民ニ委托セス学校ノ管轄ヲ特ニ政府ノ任トナセル国内一般ノ美事ヲ為セリ此故ニ合衆国教育ノ方法ハ皆欧羅巴洲ノ教方ニ基ケルモノニシテ其旨趣多端ナレハ素ヨリ多年ノ論議ヲ歷テ漸ク今日ノ勢ニ至リシナリ故ニ此国教育ノ旨趣ヲ知ラント欲セハ先ツ其論議ノ源委ヲ探討スル事肝要ナルヲ以テ今左ニ其要旨ヲ撮ミテ之ヲ約言ス
但「マッサセッチュ」一州ハ、童男女ヲ入学セシメサル父母ニハ、二十弗ノ過料ヲ収ムル法ヲ、一千八百六十三年以来設ケタリ、勸学ノ法ハ、如此ニ寛政ヲ主トスレトモ、各州ニ於テ、学校ヲ平民ト僧徒トニ委任スルコトハ、其弊ヲ実験シテ廃止セリ、	
○此国ニ植民ノ初メハ、教育ノコトモ本国ノ法ニヨリ、西班牙人ノ「シント、オーゴスタン」ニ移リ、英人ノ「シント、ゼームストン」ニ移リ巡回教父ノ「プレモンス」ニ移ル、等一家ノ民族、或ハ僧徒ノ内ヨリ、総代人ヲ挙テ、教育ノ世話ヲサセタレトモ、新英倫(「マッサセッチュ」「ロードアイラント」「カナデガット」新「ハムフシヤ」ノ四州ヲ「ニューイングランド」ト云フ)ニテハ、教育ノ權ヲ僧徒平民ニ委セス、政府ニテ管轄ナシタルニ、僧徒平民ニテ支配スル学校ハ、開智ヲ進歩スル主要ヲ失ヒ、政府支配ノ州々ハ、其効著シカリシヲ以テ、各地頓テ之ヲ廢止シ、政府ニテ司ルコトナシタリ、只蓄奴ノ行ハレシ南方ノ諸州ハ、兎角其挙モ行ハレサリニ、近年南北ノ戦火テ後、ミナ之ヲ廢止シ、今日各州ノ政府、ミナ学校ヲ支配セサル所ナシ、其他ノ学制モ東北ノ諸州ヨリ始リテ、各州ニオヨヒ、各其民宜ヲ酌ミ折衷セシヲ以テ、大同小異ニスキスト云、	

一方、「回覧実記」は「一種のエンサイクロペディア」としての役割を果たしている(田中 彰 2002 pp.60-64)。この「回覧実記」の性格については、使節団が出発前に使節団首脳に密かに渡されたと思われる、使節団報告書作成のための手引き書「フルベックより内々差出候書」の項目を見れば明らかであり、(田中 彰 1991、解題、p.371) それらの項目が報告書を一種の「百科事典」と云って良いものとしている。

近代百科事典は、英国では1834年来、Chambers兄

弟が「Chambers's Information for the People」を刊行し、1873(明治6)年に「百科全書」として翻訳出版された(福鎌達夫 1968)。その中で教育関係については、1873年に箕作麟祥が「教導説」(1875年に「教育論」と改題)として翻訳刊行している(村瀬、早川、田中 2006)。

「回覧実記」を「百科事典的書物の流れからみるならば、明治維新という封建から近代への一大転換期における社会・文化の反映、とくに日本の場合、外国の

制度・文物の移入・移植の側面が大きな比重を占める)としての産物としてみることができる。こうしたエンサイクロペディアの視角から『回覧実記』をみ、これを位置づけ、分析することは、明治維新という変革が何であったかを新しい視点から照射する一つの方法となるにちがいない」のである。(田中 彰 2002 前出)。

この観点からの基礎的資料として、田中 彰・高田誠二編著 (1993) における①「『米欧回覧実記』技術関連項目 (吉田文和・遠藤一夫編)、②農業関連項目 (高井宗広編) 解説分類集成」が既にある。

本稿では、それらに加えて「教育関連項目」を「集成」して、如何に岩倉使節団が教育に関心があったかを示し、さらに、その関心を量的に示すため岩倉使節団の旅程を追い、訪問教育関係施設を国別、種別に分類して検討する。

エンサイクロペディアとして扱うことの問題点については、「エンサイクロペディア的記述を導入、ものに名を与える、それを系統立てたことの歴史的意義は認めても、～使節団のメンバーが訪問先の各地でしたためていたメモ類には、不十分なもの、誤解したもののが少なからず、～見えるものだけしか見でこなかった」などと、長島要一 (1993 p.166) の指摘がある。したがって、当時の欧米の教育事情との比較研究などが必要であるが、本研究により「回覧実記」の歴史的意義を認め、使節団の教育への関心と理解を知ることができ、その後のわが国の教育政策への意図をひも解く手掛かりを得ることができ意義あるものと思われる。

4. 教育関連項目集成

資料1には、先に述べた「技術、農業関連項目分類集成」と同様、「米欧回覧実記」に記載された「教育関連事項 (『宗教』関係の「教」は除く)」を記載年月日順に、関連語のみではなく必要に応じて前後の文章を抽出し、語の意味を確認するようにした。しかし、細目の分類はせず、後述するように、この資料に基づいて、使節団が訪問した教育関連の施設のみに注目して資料2を、さらに訪問施設の国別、種類別数の表3を作成した。

資料1 (全巻約123万文字数のうち教育関連は1割)、および「文部省理事功程」(全15巻約37万文字数)を考慮すると、教育関係は量的に3分の1になる。このことは使節団の教育に対する関心の高さを示し、内容を見ると、米欧において具体的に知識を吸収し、実際

に観察したということが分かる。

例えば、米国の教育の方法について政府と州の関係、さらに、人民との関係、人民自身の問題について次のように述べている。

「大政府ヨリ格別ニ注意セス、各州ノ自定ニ任ス、各州ノ政府ニ於テハ、之ヲ民政中ノ一大事務トナシ、毎年州ノ議院ニ於テ、学税ヲ議定シ、～建校勸学職制等、ミナ州々ニテ思ヒ思ニ其周備ヲ競フ、故ニ全国一規ノ学制ハアラサルナリ、但其大要ハ、合衆國ノ本領ニヨリ、人民ノ意ニ任せ、人々自ラ奮發セシムルヲ旨トス、故ニ歐洲ノ如ク父兄ヲ督責シ強テ嚴法ヲ以テ迫リ、子弟ノ入学ヲ促スコトナケレトモ、人ミナ不学ヲ恥テ、自怠ラサルハ、合衆國ノ氣習ニテ、自由寛政ノ実行ト謂ヘシ、①70-72」。

また、一行は、米国の宏大な国土が一世紀で開拓され急速に発展したか、それと比較して狭い国土の日本が長い歴史をもちらながら必ずしも発展していない、この差は何故かと問う。それは経済力の問題だけではなく、人力を含めた『物力』の差にある、と『回覧実記』は指摘する (①162)。そして、日本に欠けているのは宗教と教育の力にあるのではないか、さらに「普通教育」について「米国ノ紳士ミナ熱心ニ宗教ヲ信シ、盛ンニ小学[基礎教育、①168]ヲ興シ、高尚ノ学ヲ後ニシテ、普通ノ教育ヲ務ム、是其故ヲ察スヘシ、①162」(補足13) と着目し、この教育が普及しない限りは開拓のエネルギーにはなりえない、とみている (田中彰 2003a)。

5. 教育施設の訪問

(1) 教育関係施設訪問旅程

使節団一行の本隊と田中不二磨理事官の旅程を教育関係施設訪問を中心に関連記事も併せて、日本を出発してから「回覧実記」および「理事功程」が出版されるまでを資料2に示した。この表の作成には以下の文献を用いた。

- (1) 「特命全権大使米欧回覧実記」久米邦武編 田中 彰校注 (一～五) (1977-1982) 岩波書店。
- (2) 「『理事功程』研究ノート」小林哲也 (1974) における「理事官の旅程」。文献の出典記号は以下の通りである。
 - A : 「特命全権大使米欧回覧実記」
 - B : 「木戸日記」二、ただし、小林 (1974) に記載のない場合は、例えば、K220で示した。
 - C : 「新島襄先生詳年譜」改訂増補
 - D : 「新島先生書簡集」D-1 : 「新島先生書簡集続

編」

E : Arthur S. Hardy, Life and Letters of Joseph Hardy Neesima 1892.

F : 「英文日記 (1872・3・28—1872・8・25)」、新島 裏手記、同志社蔵

G : 「松香私志」長與專斎著 明治35年

R : Report of the Commissioner of Education for the Year 1872, Washington : Government Printing Office, 1973.

(3) 本稿で追加した資料は以下の通りである。

(a) T : 「アメリカの岩倉使節団」富永 孝 (1992) における教育施設訪問の部分

(b) Go : 合田一夫「フィラデルフィア」における岩倉使節団別働隊の記録、「実記を読む会」メンバーの読書レポート③私は「米欧回覧実記」をこう読んだ 米欧回覧ニュース第21号 (2001年11月30日発行)

(c) O : 大越哲仁「新島裏、田中不二麿と岩倉使節団」イアン・ニッシュ編／麻田貞雄訳「歐米から見た岩倉使節団」ミネルヴァ書房 2002 (文献として用いたのは「新島裏全集 同朋舎出版 1983-1995」)

(d) IR : イアン・ニッシュ編・麻田貞男他訳「歐米から見た岩倉使節団」ミネルヴァ書房 2002からの引用は、例えば、「第七章 pp.187-204」は、「IR⑦187-204」と表示した。

(4) 使節団の行程については、既刊の資料に加えて「公文書に見る『岩倉使節団』インターネット特別展アジア歴史資料センター国立公文書館」(2007)。

(2) 訪問施設のまとめ

資料2を表3に、使節団が訪問した教育施設の数を国別（訪問施設がない国を含めて）・種別で纏めた。この表について次の注意すべきことがある。

1) 旅程について。資料2の大部を占める小林哲也の資料は小林が述べているように（小林哲也1974 pp. 90-91）、「諸資料の中でも新島の『英文日記』に頼ることがもっとも大きかったが、それを扱った明治5年3月末から8月末までの期間はともかく、それ以外の田中らの行動について不明な点が多い。殊にプロシャやフランスでの行動は殆ど分からず。～上記期間内でも、新島の記録の密度の濃淡、それは彼の外国语理解能力と多分関係していると思われるが、～また田中・新島以外の隨員の行動や役割が、一部を除いてほとんどわからない」ので、将来、その点からの修正が必要

となるであろう。

2) 表3の作成について。資料2の旅程を見れば分かるように、学校等教育施設の訪問には、使節団本隊と理事官が、行動を共にしている場合があり、訪問校を全て加算することはできない。なるべく重複を避けたが分離が困難な場合もあり、ここではそれぞれの記載のままにしてある。特に、米国では同行している場合が多いので、明確に別行動をしている場合を除いて分離していない。

3) 大、高、中、小学校などの分類に曖昧な点がある。例えば、明治4年6月24日訪問の、「デラルト、コルレーチ」について、「此大学校」と表現しているが、2行あとに「此校ハ六歳ノ童ヨリ入学シテ～」とあり、現代語訳は、[この大きな学校、①p.364]としているように大学として扱うことはできない。

4) 「不特定の学校」には、「学校」とのみ記載されていて内容不明のものを纏めた。

このような曖昧さがあるので、今後、当時の現地の新聞記事、市の歴史等の資料の詳細な調査が必要であるが、この表は使節団が訪問した教育関係施設の大略を示しているものと考える。

以上のことを注意した上で、まず明らかなことは、滞在期間（補足14）が長かったことにもよるが、訪問施設数は、米国・英国に多く（補足15）、特に、大・高・中等の一般教育関係施設が多いことである。次に、実に多様な施設を訪問していることが分かる。このことはフルベッキの「ブリーフ・スケッチ」の反映であろう。すなわち、商業学校、工業学校などは、「The Officers of this commissions ought to visit and see ~ Special schools, such as Polytechnic and Commercial schools」、兵学校については、「They ought to visit ~ Naval and Military schools ~」、神学校、ミッションスクールなどについては、「~ to examine well, whether there be anything in the religions of Western countries which would prove to be of special danger and injury to the Government and people in Japan ~」とある。しかし、「事由書」では除かれていることを考えると、当時、神学校の学生であった新島 裏の関与による可能性が高い。また、盲啞・聾啞学校の訪問が多いことは、「ブリーフ・スケッチ」にはないが、「フルベッキより内々差出候書」に「講究スペキ目的」の記載がある。

表3. 訪問施設のまとめ

Table 3. The summarization of the institutions visited by The Iwakura Embassy.

太丸数字は「回覧実記」、細字はその他の資料による。

米国については本隊と別働隊の区別が明確でないので分離していない。

訪問国 教育関連施設	米国	英國	仏蘭西	白耳義	和蘭	独逸	露西亞	塘馬	瑞典	以太利	塊地利	瑞士	中國	小計
幼稚園	9	①			1	①			①			2①		1
小学校	3				1							2		16
女学校	6	2	①											6
中学校	6													9
高校	6													6
大学・大学校・カレッジ	15	8			2	②	1					3		31
師範学校	4						1							5
科学学校	2	1				①	1					1		4
医学校												1		3
商業学校	1	1												2
実業学校		1												1
工業学校		1												1
農村学校		1												1
職業学校	1	①			1									2
船学校												①		2
建築学校			①											1
礦山学校			①											1
兵学校	3		①											5
神学校	1													1
盲聾・聾啞学校	5	3	①									2		11
障害者施設	1	1												2
少年院（感化院）	4	1												5
孤児院	1	1①	①			①	3							8
養護院		2			1									3
アカデミー	3											1		4
セミナリー	3													3
ミッションスクール	1													1
日曜学校	2	1												3
不特定の学校	13	7			1			1				2		24
小計	84	34	6		8	5	6	1	2			15	1	162
滞在日数（補足16）*	205	122	67	8	11	33	18	5	8	26	16	27	0	

* 当初の予定は、滞在日数（6ヶ月半）および旅行日数（4ヶ月）、合計10ヶ月半であった（大久保 1976 pp.104-106）。

小菅心子（2000）は「使節団の教育施設の見学について」、次のように纏めている。

「①訪問校はアメリカが最も多い（15校）、②障害学校への関心も強い、③女子教育にも強い関心をもつ、④各国の学校の数、就学児童数、学費、規模、経営の方法等について数字が細かく記載されている、⑤職業訓練校の見学記も詳しい、⑥カリキュラム、教科（8教科）音楽科の効用、⑦明治5年の学制はフランスの制度を取り入れたといわれているが、フランスでの見

学校は少ない。」

本稿では、使節団本隊のみでなく別働隊の訪問をも考慮しているので、使節団の米・英国における訪問教育施設は、さらに多種多様で数も多く、特に、使節団が関心をもった大学、高校、中学、小学校等の普通教育の施設が圧倒的に多く、実業に関連した教育施設・盲聾啞院・少年院等にも訪問するなど、使節団の教育施設訪問の全体像が明らかになった。

6. おわりに

本稿は、岩倉使節団の報告書とも言うべき「回覧実記」について、まず、エンサイクロペディア的側面に注目して、教育関連の事項を抽出・集成し使節団の教育への関心度の高さを明らかにした。さらに関心度を量的に確かめるために、「回覧実記」に加えて既存の文献、「文部省理事功程」等を用いて使節団の旅程を追い、訪問した教育関連施設の種別、国別に分類し、岩倉使節団の教育に対する関心度の高さの全貌を明らかにした。

「回覧実記」と「文部省理事功呈」が、その後どのように明治の教育に関わったか、使節団の歴史的意義について田中 彰（2002）、前出の小菅（2000）たちの研究がある。小菅の記述を引用しておく。

「使節団に随行して米欧の教育制度を研究した田中不二麿とダビッド・モルレーによるいわゆる『自由教育令』の中にアメリカの地方自治的にして自由放任的な要素が多分に盛り込まれているが、これに対して即、元田永孚は『洋風是競うに於いては将来の恐るところ終に君臣父子の大義をしらざるに至らんも……』（教学聖旨）と宮内庁よりブレーキをかける。そして田中は司法郷に転出させられ、中央集権化による官僚支配が確立していく。元田に対しては伊藤博文も反論するが（教育議）－（教学論争）、やがて政権を握り組閣を前にすると（明治16年）文部大臣候補の森有礼に伊藤は『教育は……必ずや幼童を薰陶して人の人たる所以を知らしめ……一国の精神を興起せしむるを要とすべき……』と説き、森もそれをうけて（明治18年）全国の知事、区長に『良き人物とは、善く国役を務め、また善く分に応じて働くことをいうなり……』と元田の考え方を結果として全国的に広めていくこととなり、更にそれが教育勅語（明治23年）へと発展していくのである。」（森文政については、例えば木村力雄1985が扱っている）。

田中不二麿は、体制がまだ固まらない文部省の責任者として、学制の運用、教育令制定に尽力貢献したが、司法郷に転出させられた。その教育思想、教育施策上、大きな影響を与えた欧米視察との関連については森川輝紀（1971）の研究がある。

久米邦武は、「回覧実記」五編百巻を編修後、歴史学界に転じ、東大教授となり、近代史学の創出に努めるが、1891（明治24）年「神道は祭天の古俗」による筆禍を招き東大を追われた。

「回覧実記」についての、その後の研究は、戦前・戦後の四期に時期区分した研究史（田中 彰 2002）を通して知ることができる。研究の将来については、近年、「回覧実記」は英語（Healey and Tsuzuki

2002）、独語（Pantzer 2002）に翻訳され、また海外の研究も盛んになって日本の近代化研究の基礎資料となり国際的研究の進展が期待されている。

謝 辞

本研究の大部分は文献に記載した資料に依存している。先学に敬意と謝意を申し上げる。また、本研究を纏めるに当たり多くの方からご意見を頂いたが、誤謬、粗漏について教育、歴史学の研究者からのご意見、ご批判を頂ければ幸甚である。

補 足 (Supplementary explanation)

（補足1）改暦により、明治5年12月3日が明治6（1973）年1月1日となった。陰暦（旧暦）と陽暦（新暦）の変換は、次の変換プログラム（1870-2020年版）によった。

<http://home10.highway.ne.jp/endakane/inreki2000v2.htm>

（補足2）1859年に来日し長崎で宣教師として教鞭をとっていたフルベッキは、政府の招請で上京し、1869年6月11日（明治2年5月2日）、かつての門下生で、参与兼外国官副知事、会計官副知事も兼任していた大隈重信に一通の意見書「ブリーフ・スケッチ」を送り、日本から欧米への視察団派遣をすすめた。大隈は視察団派遣は時期尚早として意見書を秘蔵にとどめた。

1871（明治4）年、当時米国在住の伊藤博文は、本国政府に条約改正の時期に当たり、欧米の調査が必要と意見書を提出している。7月に行われた廃藩置県後、大隈は条約改正交渉のための使節派遣およびみずからがその使節たらんことを閣議で発議し、閣議はそれを「一応内諾した（推定）」。ところが大隈使節団の計画は岩倉使節団にきりかえられた（大久保利謙編「岩倉使節団の研究（1976）」）。

使節団構想を練っていた岩倉は、10月26日（明治4年9月13日）フルベッキに会い、意見書の内容の教示を頼み16日には「ブリーフ・スケッチ」を受け取っている。（「回覧実記」①田中 彰解説 p.398-405. 国立公文書館アジア歴史資料センター、インターネット特別展「公文書に見る岩倉使節団」）。

（補足3）「岩倉具視関係文書」所収の「神州萬歳堅策」には「貴國ニシテ不可限先ツ舊好ノ唐蘭ヲ始トシ西洋歐羅波各国ニ使節ヲ立其風習ヲ察シ其產物ヲ視～使節ヲ立ラル、時ハ朝廷ヨリ二人関東ヨリ大名二人國主大名ヨリ各二人大名ヨリ各二人ツ、其隨從士僕ノ多少～」とある。「堅」の文字があるか無いかについては、大久保利謙「岩倉具視」維新前夜の群像 7 増補版 中央新書 P.46-47, 1990に解説がある。

（補足4）「ブリーフ・スケッチ」における教育施設訪問について、「C 各国の国立大学および高等学校の～この任務を有する役人は、大学、公立・私立学校、また工芸学校や商業学校などの特殊学校を訪問し、十分に見学をしなければならない。」（大久保利謙 1971 p.43、田中 彰 1991 p.360）、「事由書」について、「第三課、各国教育ノ諸規則、～官民学校、貿易学校、諸芸術学校、～等ノ体裁及現ニ行ハル、景況トヲ親見シ～」とある（大久保利謙 1971 p.162）。

(補足5)「理事官」とは、「回覧実記」(一) 374頁にある「校注」によれば、各省より派遣された専門別調査官で、その任務は「勅旨」で次のように規定されている。

一、各国ノ内文明最盛ナル国ニ於テ、本省緊要ノ事務、目今実地ニ行ル、景況ヲ親察シ、其方法ヲ研究講習シ、内地ニ施行スヘキ目的ヲ立ツヘシ 一、研究講習スル事務ノ科目ヲ分チ、及其國ヲ定メ、便宜行事ノ循序期限等ハ特命全権大使ノ指揮ニ従フヘシ 一、隨行ノ官員ニ事務ノ科目ヲ分ツハ特命全権大使ノ指揮ニ由ルト雖トモ、其分任ノ事務ヲ督シ、之ヲ整理スルノ責ニ任スヘシ 一、本省要用ノ為メ外国人ヲ雇ヒ、書籍器具等ヲ購スル事アラハ、特命全権大使ノ決判ニ従フベシ 一、臨機ノ事ハ特命全権大使ノ指揮ヲ受ケ置スヘシ 一、当務ノ顛末、研究學習ノ功程等、時々書録シテ報告スヘシ (『大使全書』第二十三号)

なお、右にいう理事官の報告書を『理事功程』という。

(補足6)「功程」とは、字通：綿密な仕事。

(補足7)「デラルトコレーチ」については、「万延元年遣米使節団」が既に訪問し、佐野 鼎「万延元年訪米日記」の記載を石附 実 (1985 pp.267-270) が紹介している。

(補足8) 明治四年十二月十五日の木戸日記に学校名はない：「同十五日 晴今日小學校へ公使と領事官の案内にて十字より巡見せり三處の小學校に至る～」。「ランマン女学校」については、田中・高田 (1993p.79) では、デンマン女子初等中学校。水沢 周 (2005) の現代語訳には訳者注はないが、「デンマン」女学校。また、富永 孝 (1992) では、「デンマン中学校」となっている。現著者の調べでは、San Francisco History Public Schools 1879-80のDenman Grammar Schoolの項目に、This school is pleasantly located on the northwest corner of Bush and Taylor streets～erected in 1864. It is now exclusively a girls' school, and contains 825 pupils. とあり、岩倉使節団が訪問した当時の校長は James DENMANである。

<http://www.sfgenealogy.com/sf/history/hgsch79.htm>

同様に、「リンカーン」小学校については、田中・高田 (1993p.79) では「リンカーン男子初等中学校」、上記のSF HistoryにLincoln Primary Schoolの記載はあるが、内容が「回覧実記」と一致しない。なお、富永 孝 (1992) p.50の「デンマン中学校 (サンフランシスコ古文書館)」とある写真の説明として写真上に「Lincoln school, 1872 SF」と記されている。
<http://www.sfgenealogy.com/sf/schools/sfdata2.htm>

(補足9) 明治五年正月十九日 (1872年2月27日) の木戸日記にも、大学校名はない。学長名は、日記には「此校の統梁ロヘルトイバチソソ面會して校中を案内せり」とある。

(補足10) 罪童学校：木戸孝允日記 (1933 p.148) 「是は廿一歳前有罪のものを教育する所にて五字書籍を教へ五字は芸術を学ばしむと云～」。

(補足11) 黒人学校：木戸孝允日記 (1933 p.148) 「～曾て南北戦争節セネラールを勤め～ものの発起にて此学校を起し大に黒奴を教育する～」。

(補足12) 明治六年一月二十八日の木戸日記：「同二十八日晴

朝至西岡一字半より田中文部今村和郎と中學校に同行し校中の様子を一見す～」とある。

(補足13) 普通教育について、原典における「普通（教育）」は、英訳では「elementary ed. p.30, p.70, universal ed. p.162」、「小学（校）」も「elementary (school)」が使用されている。ここでいう「普通教育」は、「高尚ノ学ヲ後ニシテ、普通ノ教育ヲ務ム」とあるように「高尚ノ学」と対置されている。この「普通」は、フルベッキのブリーフ・スケッチにおける「popular education」の「popular」と解して良いであろう。Webster's Essential English Dictionary によれば、popularは「1. of, relating to, or coming from the whole body of people. 2. suitable to the average person : easy to understand ~」であり、「回覧実記」の意は「人民の、平均的な人の」教育を意味している。しかしながら、「普通教育」と訳され、次第に違った方向に解され、田中萬年 (2007) によれば、「『普通教育』は、学歴社会を反映して、『職業教育』よりもランクの高いニューアンスを与えていた。それは『普通』は『教養』に通じるという論理」が現状である。

(補足14) この間の経緯については、大久保利謙 (1976 p.128)、大越哲仁 (2005) の研究がある。「田中理事官が、なぜ使節団から離れたか」について、大越哲仁は、「使節団が条約改正の予備交渉の目的を逸脱し、～本交渉にまで及んだために交渉が難航、～大幅に足止めされたことに起因する～。すなわち、～個別調査を担当する理事官一行が、～肝心の調査が出来なくなる。そこで、日本政府に宛通達し許可を得て米国、欧州における別行動の許可を得ている。」と述べている。このことについての記載は、大久保利通日記 (1927)、大久保利通文書 (1928)、木戸孝允日記 (1933)、「回覧実記」に見られない。

(補足15)「ブリーフ・スケッチ」に、「～諸制度全体を十全に研究すべき国々は～、フランス、イギリス、プロシア、オランダ、アメリカのみである。～プロシアないしアメリカは文部省の面で教わることが多いことだろう」と述べている (田中 彰 1991 p.361)。

(補足16) 田中 彰 (2002) p.49による。

文 献 (References)

- 1858 岩倉具視「神州萬歳堅策」三条実美文書国立国会図書館憲政資料室所蔵 (1983 岩倉具視関係文書一pp.117-140 日本史籍協会編 東京大学出版會発行)
- 1872 Henry B. Ashmead, Diary of the Japanese Visit to Philadelphia in 1872
- 1873-76 田中不二麿「理事功程」文部省編 第1卷～第15卷 (再版：1877 文部省、翻刻版：1974 臨川書店、1982 雄松堂)。
- 1927「大久保利通日記」日本史籍協会叢書27 (1983 覆刻再刊版)
- 1928「大久保利通文書」日本史籍協会叢書31 (1983 覆刻再刊版)
- 1933「木戸孝允日記」(二) 日本史籍協会叢書75 (1985 覆刻再刊版)
- 1939 森谷秀亮「岩倉全権大使の米欧回覧」史学会編「東西

交渉史論」下巻所収（富山房）

1968 福鎌達夫「明治初期百科全書の研究」風間書房

1971 森川輝紀「田中不二麿の教育思想に関する一考察－歐米視察と「学制」改革の指標」東京教育大学大学院教育学研究科「教育学研究集録」10

1974 小林哲也「理事功程」研究ノート 京都大学教育学部紀要20 pp.75-103.

1976 大久保利謙編「岩倉使節の研究」宗高書房

1977 田中彰「岩倉使節団－明治維新のなかの米欧」講談社現代新書 講談社

1977-82 久米邦武編 田中 彰校注「特命全権大使米欧回覧実記」(全5冊) 岩波文庫 岩波書店

1978 石附 実「岩倉使節団の西洋教育觀察」季刊「日本思想史」7号 pp. 3-19.

1985 石附 実「西洋教育の発見－幕末明治の異文化体験から」福村出版 (VI 岩倉使節団の教育探訪)

1986 木村力雄「異文化遍歴者 森有礼」福村出版

1989 尾佐竹猛「幕末遣外使節団物語」夷狄の国へ 講談社学術文庫

1990 大久保利謙「岩倉具視」(維新前夜の群像: 7) 増補版 中央新書

1991 田中 彰校注者 日本近代思想大系1「開国」の解説・文献解題『黒船』来航から岩倉使節団へ 岩波書店

1992 宮永 孝「アメリカの岩倉使節団」ちくまライブラリー70

1993 田中 彰・高田誠二編著 「『米欧回覧実記』の学際的研究」北海道大学図書刊行会

1993 長島要一「デンマークにおける岩倉使節団『米欧回覧実記』の歪み」(前出: 田中・高田 1993 7 p.165.)

1993 西川長夫『米欧回覧実記』と「脱亜入欧」—田中 彰・高田誠二編著 「『米欧回覧実記』の学際的研究」北海道大学図書刊行会, 1993年)をめぐって一立命館 言語文化研究 5巻1号65-100 1993/10.

1994 田中 彰「岩倉使節団『米欧回覧実記』」同時代ライブラリー 岩波書店 (1977 講談社本の改題)

1995 西川長夫・松宮秀治編 「『米欧回覧実記』を読む—1870年代の日本と世界」法律文化社

2000 小菅心子「米欧回覧実記」と教育使節団の米欧見聞と維新政府による教育制度との関係「実記を読む会」メンバーの読書レポート②私は「米欧回覧実記」をこう読んだ 米欧回覧ニュース第20号 (2000年8月25日発行) より

2001 合田一夫「フィラデルフィア」における岩倉使節団別働隊の記録「実記を読む会」メンバーの読書レポート③私は「米欧回覧実記」をこう読んだ 米欧回覧ニュース第21号 (2001年11月30日発行)

2002 イアン・ニッシュ編・麻田貞男他訳「欧米から見た岩倉使節団」ミネルヴァ書房 (Iwakura Mission in America & Europe, Ed. Ian Nish 1998)

第二章 イアン・ラックストン「イギリス (2) 岩倉使節団－その意図、目的、成果」、第三章 リチャード・シムズ「フラン

クス友好的イメージをつくるには、第四章 W.F.ヴァンドウ・ワラ富沢 克訳「ベルギー小国が偉大になる方法」、第五章 ウルリヒ・ヴァンテンベルグ 望田幸男訳「ドイツ 二つの新興国の出会い」、第六章 イアン・ニッシュ 諸早勇一訳「ロシア後発の大國を視察して」第七章 ベルト・エドストロム伊藤彌彦訳「スウェーデン使節に対する接待外交」、第八章 シルヴァーナ・デ・マイコ 岩倉翔子訳「イタリア外交文書と新聞記事からみた岩倉使節団」第十章 「新島襄、田中不二麿と岩倉使節団」大越哲仁

2002 田中 彰「岩倉使節団の歴史的研究」岩波書店

2002 Graham Healey and Chushichi Tsuzuki, The Iwakura Embassy, 1871-73, A True Account of the Ambassador Extraordinary & Plenipotentiary's Journey of Observation, Through the United States of America and Europe, Compiled by Kume Kunitake, Editors-in-chief. The Japan Documents, Chiba.

2002 Peter Pantzer, Die Iwakura-Mission, Das Logbuch des Kume Kunitake über den Besuch der japanischen Sondergesandtschaft in Deutschland, Österreich und der Schweiz im Jahre 1873, übersetzt und herausgegeben, München, Indicum.

2003 米欧回覧の会編「岩倉使節団の再発見」思文閣出版

2003a 田中 彰「明治維新と西洋文明」—岩倉使節団は何を見たか—岩波新書

2003b 田中 彰「明治維新」講談社学術文庫

2004 泉 三郎「岩倉使節団という冒險」文芸春秋

2005 宮永 孝「万延元年の遣米使節団」講談社学術文庫

2005 久米邦武編著 水澤周訳注「現代語訳特命全権大使米欧回覧実記」米欧五回覧の会企画 慶應大学出版会

2005 大越哲仁「最初の私費留学生－新島襄と岩倉使節団、そしてヴィーズバーデン」日本ペンクラブ電子文芸館編輯室
<http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/study/ohkoshitetsuji.html>

2006 村瀬 勉、早川亜里、田中萬年「百科全書『教導説』の検討」—箕作麟祥による『Education』の翻訳—職業能力開発総合大学校紀要第35号B人文・教育編 pp.1-22.

2007 公文書に見る「岩倉使節団」インターネット特別展 アジア歴史資料センター国立公文書館

<http://www.jacar.go.jp/iwakura/sisetudan/main.html>

2007 田中萬年「働くための学習」—「教育基本法」ではなく「学習基本法」を一学文社

資料1 教育関連項目集成

Reference mat. 1. Compilation of the educational terms in Kume's Be-O Kairan Jikki.

凡 例

- 原典記述、事項説明、「回覧実記」日付（陰、陽曆並記）、関連注、記載編頁に分けて示した。例えば、①42は岩波文庫版第一編北亞米利加合衆国ノ部第42頁のように示す。したがって、明治11年10月刊大久保利謙（1976）の松尾章一による年譜（pp.328-361）とは頁が違う。また、この年譜に記載されていないものを（現著者注、大久保1976に記載なし）で示した。
- 原典は「漢字・片仮名」書きである。その他の校注者の解説および本論文著者の注書きは「漢字・平仮名」を用いた。
- 〔 〕内は、「2005 久米邦武編著 水澤 周訳注」から関連あるものを引用した。巻数（丸数字）と頁数で表示した。
- 長文にわたる場合は適宜省略した。

例 言

原典記述	事項説明	記載頁
各省理官ハ、各國政教兵備ノ底細ヲ視察歴訪シ、報告ノ書、數大部ヲナセリ、	米欧回覧実記に関する 例言	9
皆一行ノ健勉ヲ祝セサルナシ、		13
西洋ノ學芸ニ、「タオリック」（理論）「プラチック」（実験）ヲ分カツ、理論ハ普通ノ通則ニテ、実験ハ各地ノ活機ヲ、習煉悟得スルモノニテ、偏廢スペカラス、		14
各書ニ就テ学ヒテ可ナリ、		16

目録 初編

原典記述	事項説明	記載頁
普通教育	第二卷	30
「ランマン」女学校	第三卷	
「リンコールン」小学校教官俸給ノコト		
「オ、クランド」学校回覧	第四卷	31
兵学私校 盲哑院		
「モンティンホール」学校及ヒ「モルガン」商業学校	第六卷	33
市高俄府小学校	第八卷	34
黒人学校	第十一卷	35
「スミソニヤン」学校	第十二卷	
「アナポリス」府海軍学校	第十三卷	36
「ウェストポイント」ノ陸軍学校	第十四卷	
陸軍生徒教練試験		
「ジラルト」学校	第十八卷	38
聾兒院	第十九卷	39
波士敦大学校	第二十卷	40

第一編 北亞米利加洲合衆国ノ部

「初編ハ西航ノ始メニテ、注意多ク風物ノ異ヲ采論スルニアリ」①13

原典記述	事項説明	「回覧実記」 日付・注	記載編頁 ①は編数
女学生四名モ皆上船シ、（校注によれば、五名）	太平海航程ノ記	明治4/11/12 陽曆1871/12/23	①42
○此国ハ土礦二人稀ナル新州ナレハ、経國ノ業ハ殊殖民ニアリ、～各国ノ流民ハ、大抵懶惰ノ頑民ニテ、～教育保護ノ法、多少ノ力ヲ要ス、	米利堅合衆国ノ總説		①69
○学校ノ教育ハ、普通ニ手ヲ尽セリ、小学校ノ多キト、新聞紙ノ多キ、入学ノ童子ノ多キトハ、諸國ニ超越ス、～全国大小学校ノ総数ハ、十四万千六百二十九ヶ所、～教師～、生徒～、学費諸料～、其内生徒ノ家ヨリ出セル學費ハ、～取立タル學税、～其余ハ学校ノ～、所有物～○教育ノ方法ハ、大政府ヨリ格別ニ注意セス、各州ノ自定ニ任ス、各州ノ政府ニ於テハ、之ヲ民政中ノ一大事務トナシ、毎年州ノ議院ニ於テ、学税ヲ議定シ、～建校勸学職制等、ミナ州々ニテ思ヒ思ニ其周備ヲ競フ、故ニ全国一規ノ学制ハアラサルナリ、但其大要ハ、合衆国ノ本領ニヨリ、人民ノ意ニ任せ、人々自ラ奮發セシムルヲ旨トス、故ニ歐洲ノ如ク父兄ヲ督責シ強テ嚴法ヲ以テ迫リ、子弟ノ入学ヲ促スコトナケレトモ、人ミナ不学ヲ恥テ、自怠ラサルハ、合衆国ノ氣習ニテ、自由寛政ノ實行ト謂ヘシ、	①70-72		

但「マッサッセチュ」一州ハ、童男女ヲ入学セシメサル父母ニハ、二十弗ノ過料ヲ収ムル法ヲ、～勸学ノ法ハ、～各州ニ於テ、学校ヲ平民ト～、○此国ニ植民ノ初メハ、教育ノコトモ本国ノ法ニヨリ、西班牙人ノ「シント、オーゴスタン」ニ移リ、～等一家ノ民族、或ハ僧徒ノ内ヨリ、総代人ヲ挙テ、教育ノ世話ヲサセタレトモ、(「マッサセッチュ」～)ニテハ、教育ノ権ヲ僧徒平民ニ委セス、政府ニテ管轄ナシタルニ、僧徒平民ニテ支配スル学校ハ、開智ヲ進歩スル主要ヲ失ヒ、政府支配ノ州々ハ、其効著シカリシヲ以テ、各地頓テ之ヲ廃止シ、政府ニテ司ルコトナシタリ、只蓄奴ノ行ハレシ南方ノ諸州ハ、兎角其挙モ行ハレサリニ、近年南北ノ戦火テ後、ミナ之ヲ廃止シ、今日各州ノ政府、ミナ学校ヲ支配セサル所ナシ、其他ノ学制モ、東北ノ諸州ヨリ始リテ、各州ニオヨヒ、各其民宜ヲ酌ミ折衷セシヲ以テ、大同小異ニスキスト云、○大学校(「ユニヴァルシチ」)「コルレーチ」ト称スルモノ)ノ総数ハ、全国ニ三百六十九ヶ所アリ、～其内ノ於テ著名ノ大校ハ、「ケンブリッヂ」ノ「ハルワイト、コルレーデ」ニテ、～^並匹^{ひき}スル大校ナリト云、其他法律学校二十八ヶ所、師範学校八十一ヶ所、書庫ノ数百六十一ヶ所、盲院二十二ヶ所、啞院二十六ヶ所、癡院五十一ヶ所アリ、[癡院は知能障害者のための教育施設①60]

○朝十時ヨリ、「ランマン女学校」ニ至ル、此校ハ～教フル所ハ文典校(グラマルスクール)[八年制の基礎学習を行う学校、①82])普通ノ諸科～ ○夫ヨリ「リンコールン」小学校ニ至ル(又「グラマルスクール」)、此ハ市中童男ノ小学校中ニテ最大ナルモノナリ、 ○此外桑港ノ全府ニ、四十ヶ所ノ小学校、二ヶ所ノ中学校(男女各一)アリ、 ○此日隨行ノ官員ヲ派シテ、「オ、クランド」ノ学校ヲミセシム、「オ、クランド」ハ米国ノ西方ニテ、有名ナ文教場ナリ、小学校区アリ、大学校モ亦數館ヲ備フ、兵学私校アリ、盲啞院アリ、～○兵学私校ハ某氏ノ建造ニテ、大政府ノ免許ヲ受ケ、子弟ヲ取立ル処ナリ、○盲啞院ハ、全州政府ノ公校ニテ、～○大学校ハ、邑中ニアリ、～所謂「ユニヴァルシチ」ナルモノナリ、	サンフランシスコ滞在中、所在地不明 訪問	12/14 1872/1/23	①88 ①89
問、(インジアンを)教諭スレハ開化ニ赴クヘキヤ、 答、「ホヘプラフ」郡(村落ヲ云)人種ハ教ヘテ開化ニ赴カシムヘシ、他ノ「インヂヤン」人ハ化スヘカラス、 「モンテインホール」学校ニ至ル、男女九歳ヨリ十七八歳マテノ童生百五十人ヲイレテ教フ、～「モルガン」商学校ニ至ル、此学校ニテハ諸色ノ取引、帳簿ノ附控ヘヨリ(即記簿法)、貨物運動ノ理ヲ教ユル所ナリ、 米国ノ紳士ミナ熱心ニ宗教ヲ信シ、盛シニ小学[基礎教育、①168]ヲ興シ、高尚ノ学ヲ後ニシテ、普通ノ教育ヲ務ム、是其故ヲ察スヘシ、 夫ヨリ小学校二ヶ所ニ至ル、男女ヲ併セ容ル、略「オ、クランド」ニ同シ、 朝、六時ヨリ大久保副使発程シ、「ニューヨルク」ヲ経テ帰朝セリ。	オ、クランド、隨行官員を派遣、各校・院の解説	12/20 1/29	①97-99
夜第八時ヨリ、伊藤副使発程シテ帰朝セリ、 黒人学校ニ至ル、～故ニ黒人ノ公学校ヲ興シ、白人同様ニ教育ヲ受ケシムレトモ、猶其校ヲ異ニセリ、～督學ハ只二人アリ、其一人ハ黒人「コック」氏ニテ、黒人ノ学校ヲ總提シ、下ニ執事數人アリテ、教育ノ税金、～黒人ノ少年ヲ入レテ、～大学ノ科ニス、ミシモノモ少ナカラス、～十余年ノ星霜ヲ経ハ、黒人ニモ英才輩出シ、白人ノ不学ナルモノハ、役ヲ取ルニ至ラン、 「スマソニヤン」学校ヨリ招待状来ル、山口副使之ニ赴ク～諸国ニ建タル学校ノ一ナリ、～中央ニ学校アリ、～～府中屈指ノ大校ナリ、 各州ニ農学校ヲ建設スルコトヲ定メタルモ、～学校ヲ維持スルヘキヲ布告～一行スヘテ、～「アナポリス」ニ至ル、～(海軍)学校～ニ入ル、～米國ノ官邸ニ女ヲ入ル、ヲ禁セス、海陸ノ軍校ニモ、 ウェストポイント陸軍校(ウェストポイント)陸軍学校ヲ建ツ、～学校ニ至ル、西洋諸学校ハ夏冬ニ試業ヲナシテ一休ス、	ネバダ・ユタ州における「インジヤン」に関する情報	12/25 2/3	①134
(ウェストポイント)学校ニ至リ、生徒ノ教練ヲミル、～我邦人ノ米国ニ学フモノ、海軍校ハ已ニ入校ヲ許シタレトモ、陸軍省ハ枢機ニカ、ルトテ、今ニ外国人ノ入ヲ許サス、 (ヒラデルヒヤは)文教モ亦有名ナリ、～学校ノ総数ハ、三百八十余ヶ所、 「デラルト、コルレーチ」ニ至ル、此大学校[この大きな学校、①364]ハ～「デラルト」氏ノ創建セル校[これだけではこの学校の性質はよくわからぬ。～久米ノ記述によるとこの学校はカレッジとは呼ぶものの、貧しい少年たちに基本的な言語教育を施す機関だったように思われる、～①注377](補足7)	ソルトレイキシチー訪問	毎日 2/8	①145
	解説	明治5/1/17 2/25	①162
	シカゴ訪問	1/19, 2/27	①176
	ワシントン訪問	2/12, 3/20 2/13, 3/21	①212 ①213-216
		2/17 3/25	
		3/10 4/17	①228
	ワシントン解説	3/23, 4/30	①242-243
	アナポリス訪問	3/27 5/4	①247
	ウェストポイント訪問	5/6 6/11	図版264 ①265-269
		5/7 6/12	
	ヒラデルヒヤ解説	6/24	①321-322
	ヒラデルヒヤ訪問	7/29	①325

夫ヨリ少年教会堂[青年クリスチヤン協会 (YMCA)、①383]ニ至ル、～其屋造ハ、略学校ニ類ス、 学校ノ報告五百〇二～当府ノ大学校ハ、高名ナル教養ナリ、 (ボストン) 市中ヲ巡回シテ、学校ニ至ル、～暑中休業ニ際シ、其詳カナルヲミルニヨシナカリキ、～波士敦ノ学校ハ～亦能ク教育スル、 木戸がこの皮相な開化と、底の浅い日本の文明の克服をめざして、教育制度に関心を払ったのも十分理由のあることだったのである。	ニューヨルク訪問、解説	6/26 7/31	①342 ①349-351 ①356-357 ①397
---	-------------	--------------	--------------------------------------

目録 第二編 英吉利国ノ部

原典記述	事項説明		記載頁
学教	第二十一巻		9
倫敦市中ノ小学校	第二十五巻		11
美爾索河船学校	第二十七巻		12
「オウン」学校	第二十九巻		13
教壇ノ遺石	第三十二巻		15

第二編 英吉利ノ部

「二編三編ハ、工芸制産ヲ詳審スルヲ務ム」①13

原典記述	事項説明	「回覧実記」 日付・注	記載編頁 ②は編数
英國ノ学校ハ「カンブリッヂ」ト「オキシホール」、両所ニ建タル大学校、尤モ盛大英國ノ鄒魯トモ云ヘキ所ナリ、[鄒は孟子の生まれたところで、魯は孔子の故郷である。転じて孔孟の学を指す。古典的学問の発生の地ともいうことであろう②訳者注31]	英吉利国ノ総説		②41-42
此ノ博覧館ハ、～書籍教育ノ具ヲ陳セル区アリ、～付属ノ学校ヲオキテ、～教育ヲ興サント議ヲ起セシハ、 (プライトン) 学校ニ至ル、～学校ヲ出テ、～[当時のプライトン・デーリー・ニュース紙の記事によると、これは学校ではなく、英國地理学会の集まりで、② 訳者注72]	ロンドン博覧館見学、解説 プライトン訪問	7/16 8/19 7/17 8/20	②65-66 ②70
(ロンドン) 府中ノ小学校一覧ス、～童男童女ヲ教育スル小校[学校②102]ハ、～唱歌ナトヲ教ユ～、女子ニハ～ノ業ヲ教ユ～技芸ヲ授クル～是其、愈学シテ～。此校ニ又五六歳ノ幼稚ヲ教フル～女教師一人～教フル所ハ～学芸～学知～教育ニ注意ヲ～幼稚ノ学教ニ注意シ、～倫敦ニアル内ニテ、学校ヲ見タルハ、唯此一ヶ所ナリ、凡ソ倫敦中ニ、公校[公立②103]二百五十、義校[私立②103]～英國ノ大学校ハ、「オクスフォルト」ニアル～、次ニ「ケンブリッヂ」ニモ、亦高大ノ学館[最もすぐれた大学②103]～	ロンドン訪問、解説	8/15 9/17	②100-101
学校ヲ建ルハ、～教育ノ末タ至ラサル所歟、	ロンドン解説	8/25, 9/27	②115
小学校ノ幼生[低学年②145]男女～	リヴァプール訪問、解説	8/30	②135
図引ノ学ハ、小学普通ノ科ニオキ、皆人之ヲ学フ、		10/2	②141
船学校[商船学校②p.154]ヲ見回ル、船学校ハ、～政府ヨリ学校ニ与ヘタリト、～水夫ノ働キヲ教ヘル船ナリ、～同様ノ悪児[非行のあった少年たち②155]ヲ入レ、教ユル所ニテ、			②142-143
牢獄ニ至ル、～勉強シテ、～勉強スルモノハ、～勉強ノ習癖ヲ生シ、	メンチェストル牢獄における生活	9/3 10/5	②165-167
「オウン」学校[オウンズオウエンズ・カレッジ②205]ニ至ル、～此学校ハ府中ノ繁華ニ比スレハ～	メンチェストル訪問	9/6 10/8	②183
(ウェストパーク) 園前ニ哥羅斯哥「ユニヴァルチシー」[グラスゴー大学②222]アリ、此大学校ニ～高名ナル大学校ナリ、	グラスゴー説明	9/8 10/10	②198
大裁判所～ニ至ル、～傍ニ学校アリ、～大学校＜「ユニヴァルシティー」＞ニ至ル、～大学校ハ、一年ニ出入ノ書生二千人、～此校ハ高名ノ学宮ナリ、	エデンボルグ説明、訪問	9/12 10/14	②209-211
此河口（「タイル」河）ニモ、～船学校[水夫養成校②324]（現著者注、大久保1976に記載なし）アリ、性質ノ惡シキ子弟ヲ入テ、水夫ノ業ヲ教習ス、	ニューカツソル訪問	9/21 10/23	②281
(ソルテヤ) 邑中ニ小学校ヲ建ツ、村民ノ子弟男女ヲシテ、半日ハ場[工場②331]ニ出テ、業ヲ操リ、半日ハ校ニ入りテ教ヲ受ケシム、学知ト実験ト、互ニ相進メル良法ニテ、	ヨークシャー州「プラットホール」	9/23 10/25	②286
「サー・クロスリー」氏ヨリ建立セシ学校[クロスリー孤児院・学校②340]アリ、其校ニ至ル、	ハリファックス訪問	9/24 10/26	②294-295

「チャンセ」氏ノ製造場ニ至ル、～場内ニ学校（現著者注、大久保1976に記載なし）ヲ設ケ、～小学普通ノ学ヲ～	バーミンハム訪問	10/4 11/4	②336
東洋人ハ実験ニ巧者ナリ、西洋人ハ術理ニ達者ナリ、東洋ノ巧ミナルハ手術ニアリ、西洋ノ巧ミナルハ器械ニアリ、	ロンドン解説	11/11 12/11	②378
「普通ノ教育」に力をそそぐアメリカの実情をみて、使節団は、東洋ひいでは日本が～	「回覧実記」校注者の解説		②416

目録 第三編 欧羅巴大洲ノ部 上

原典記述	事項説明	記載頁
教育	第四十一卷	9
「ニコールサンシール」陸軍学校	第四十五卷	11
建築学校 磐山学校	第四十六卷	12
啞院 盲院	第四十八卷	
人種教育	第五十二卷	15
国府大学附属ノ博物館	第五十三卷	
教育	第五十五卷	16
伯林大学校	第六十卷	18

第三編 欧羅巴大洲列国ノ部 上 仏朗西國、白耳義、荷蘭陀

「二編三編ハ、工芸制産ヲ詳審スルヲ務ム」①13

原典記述	事項説明	「回覧実記」 日付・注	記載編頁 ③は編数
巴黎ノ礦山学校ハ其設ケ宏大ニテ、	仏朗西國総説		③30
教育ハ、近年ノ進歩、甚々渋鈍ナレトモ、全国ノ男女ニ、無学無筆ノモノハ、百ニ三十ニスキス、蓋此國ノ文化ハ、各地方ニヨリ、甚々不平均ナリ、			③35
此日英國辨務使ヨリ、日本ニテ、改曆、及ヒ服制改正アリシ、電信到著ノコトヲ報知アリ、因テ來月三日ヲ、新暦明治六年第一月一日トスル旨ヲ衆ニ公布ス、（十二月三日を明治六年一月一日、一千八百七十三年、一月一日とすること）		11/22 12/22 (改曆の通知)	③62,65
「アンファンド、ツルウェー」ニ至ル、棄兒院ナリ～	巴黎、訪問	(以後陽曆)	③68
「ビットショーモン」ノ公苑ニ至ル、～其一帯ノ地ハ、製造所ニテ、教育モ十分ナラス、近時或ル博士、此ニ教育ノ方ヲ施サンコトヲ思考セシニ、	解説	1873.1.10	③83
会社ヨリ学校ヲ設ク、子弟ヲ教訓上達セシムヘン、			③87
「エコール、サンシール」ノ陸軍学校ヲ回覧ス、～婦人学校ナリシヲ、～陸軍学校トナシタリ、～海陸軍校ニハ～軍学校ハ人気悪シ～仏國ノ学校ハ、多ク信徒ノ手ニアリ、是又古教新教ノ別ナリ、	巴黎、訪問、 解説	1.15	③100-104
「ワンセーン」城ノ外ニ、十余町ヲ隔テ、「デューナスチック」ノ教練スル場アリ、（「デューナスチック」ハ開展運動術ト訳スモノニテ～）		1.18	③117
建築学校、礦山学校ニ至リ、～建築学校ハ、～礦山学校ハ～		1.20	③122-123
此ニ前ニハ礦山学校ヲ記シ、後ニハ天文台ヲ記ス、宜シク文明ノ至リ、其術ニ於テ究メサルナキ実ヲ瞭スヘシ、		1.22	③142
啞院ハ大裁判所ノ西南ニアリ、「インステチューション、デ、ハスト」ト云、～啞人ニ教育スルコトヲ、苦心思慮シテ、～此校ノ建築頗ル壮大ニテ、		1.23この記載 について、③ 校注377-378	③152-153
盲院ニ至ル、盲院ハ之ヲ「インステチューション、デ、プライン」ト云、～仏國ノ風習、古来ハ盲者ヲ輕蔑スルコト甚タシク、～仏人「ワアレシタイン、ホーイ」氏常ニ之ヲ哀レミ、イカニモシテ教育ヲナス工夫アラント、		1.25、③校注 378頁および [③注p.176]	③153-157
白耳義ノ人民ハ、三種ノ言語ヲトル、仏國ノ境ヨリ、中央ノ諸州ハ、「ベルジェツク」人種多ク、仏語ヲトル、今政府、官庁、学校、ミナ是ヲ以テ國語トス、	白耳義國総説 解説		③178
学校ノ教育ハ、「カドレーキ」教僧侶ノ掌ル所ニテ、～教育ノト、キタル國～ミナ学校ニ上ル、国内ニ三ノ大学校アリ～			③179
教育ハ、歐州國中ニ於テ、最上開化ノ地位ニオル、此國ノ民、苟モ恒産アルモノハ、不学ナル男女甚タ少シ、～ノ三地ニ、大学校アリ、	荷蘭陀國総説		③229-230
一ノ学校ヲ起シテ、末世ニ恵センコトヲ願フ、因テ其望ミニ隨ヒテ、此ニ大学校ヲ起セリ、	来丁ノ記	2.28	③245
此府ノ大学校ニ付属セル博物館ハ、			③247

近年ニハ農業小学ノ設ケ盛シニ、～大学校ヲ処処ニタテヽ、 教育ハ、歐州中ニテ最上等ニ位ス、政府ノ特ニ心ヲ致ス所ニテ、各郡邑ノ人民、必ス租税ヲ以テ扶助シ、小学校ヲ立テ、～中学校ノ数、～其他技術学校、羅甸語学校等、～大学校ハ～	普魯士国総説		③276 ③284-285
府内ノ地ヲ、五区ニ分ツ、第一ヲ伯林ノ本部トス、此ニ寺院、学校、武庫、病院、孤院等アリ、 教会ヨリ学校ニ関スルヲ制シ、～教会ノ学校ニ関与スルハ、人民ノ心智ニ害ヲ生スルモノニテ、最モ弊アルコトナリト云、	伯林府総説	3.9	③302 ③307-308
貴族院ハ、即チ上院ニテ、王族、～大学校ノ代人、～ニテ局ヲナス、 朝十時ヨリ小学校[実際に訪れたのはケーニッヒ・ウイルヘルム高校であつたという、③注409]ニ至ル、～政府ヨリ設ケタル大校[国立の大きな学校③395]ナリ、	伯林ノ記上解説	3.12	③318
伯林大学校(「ユニヴァルシティー」)、同建築学校～	伯林ノ記下	2.23 [英訳者コビングは、このあたりの久米の日記の日付が一日ずれていますと指摘③注409]	③348 ③349図版 ③350
タニ「ユニベルシティー[フリードリッヒ・ウイルヘルム大学、③p.395]」ニ至ル、高名ノ大学校ニテ、 「啞院ハ大裁判所ノ西南ニアリ」(152頁)の注 「午後二時ヨリ、盲院ニ至ル」(153頁)の注 一行がベルリン滞在中に見学したところを、～小学校・大学校～		「回覧実記」 校注	③377-378 ③378-379 ③405
	「回覧実記」校注者の解説		

目録 第四編 欧羅巴大洲ノ部 中

原典記述	事項説明	記載頁
教育	第六十一卷	9
育嬰院 聾哑院	第六十四卷	11
解剖寮	第六十五卷	
小学校並ニ小学童生ヘ授業ノ心得	第六十九卷	14
同郊外育嬰院	第七十二卷	16
「パトワ」府ノ養蚕学校	第七十八卷	18
教育	第七十九卷	19

第四編 欧羅巴大洲列国ノ部 中

露西亞国、北日耳曼、薩馬国、瑞 典国、南日耳曼、伊太利国、奧地利国、匈加利国「四編五編ニ至テハ、復ヲ略シ異ヲ
択ミ、弥縫周備ニ意アリ、故ニ回覧ヲ略セル所ニモ、亦其国ノ特美ナキニハ非ス」①13

原典記述	事項説明	「回覧実記」 日付・注	記載編頁 ④は編数
教育ハ一千八百六十五年ニ学校ノ数三万三千ニ及ヒ、～小学、語学校、～大学校、～医学校～「ズリッキ」ノ大学～	露西亞国総説		④36-37
総テ皇族ノ所得ハ、～其内ヨリ四十五万(磅)ヲ以テ、施済学校、劇場費ニ公捐スルノ外、	セントペートルガルク 聖彼得堡ノ記解説	1873.4.3	④68
育嬰院[乳幼児養護施設④89]ニ至ル、育嬰院ハ、子ヲ擧ゲテモ、自ラ鞠養スルヲ得サル、貧民ノ子ヲ収メテ、育成スル所ナリ、～是其育嬰院ヲ宏大ニ設ケル所カ、○院ノ屋造ハ、四層ノ高字ニテ、	訪問	4.9	④91-93
○聾哑院モ、亦頗ル宏大ナリ、～其教育ノ大般ハ米仏ニテ視ル所ニ同シ、此院ニテハ、啞子ハ一般ニ发声ヲ教フ、			④93-94
夫ヨリ河南ナル、礦山学校ノ博物館ニ至ル～		4.10	④96
医学校附属ノ解剖寮ニ至ル、～入校ノ生徒ニ、蒙古人、滿州人アリ、又女医生モアリ、露國ノ婦人ハ、大学校ニ入りテ業ヲ講スルモノアリ、他國ノナキ所ナリ、～歐洲ニテ婦人ノ大学校ニ入ルハ、露國ト瑞士トノミ、	訪問	4.11	④101
○医学校ハ、築造更ニ宏大ナリ、			④102
日耳曼ノ侯伯貴族ハ、～学芸技術ニ努力シ、	北日耳曼前記		④113
印税、官給税ニテ、～其四分ノ一ハ教育、施済、警察、裁判ノ費ナリ、	ハムバニキ 阜堡府	4.17	④124
行政權ハ国王ヲ大統領トナシ、内閣議官七人ヲ命ス、總裁、外務、内務、教育、司法、会計、軍務ナリ、	薩馬国ノ記		④137
一千八百七十年ノ検査ニ於テ、全国民千人ノ比例ニツキ、農民四百五十四人、～僧俗教員十七人、～學術家六人、			④139
学校ノ教育ハ、一般ニ行ハレタルコト、歐洲ニ於テモ、比較スル国ハ多クアラス、			④141

前時女王ノ宮殿ヲ以テ、詩歌、画図、彙像等、雅芸ノ学校ヲ設ケタリ、	コッペンハーゲン	4.22	④152
瑞典人ハ活潑ニシテ、智巧アリ、酷タ学芸ヲ好ミ、～両国ノ学校教育甚タ至ル、農夫ト謂トモ、書写ヲ解セサルモノ殆ト希ナリ、教育ノ会社流行シ、～是其一般ニ教育ノ行ハル、所以ナリ、	瑞典国ノ記		④166-167
兵学校ニ至リ、	ストックホルム訪問、解説	4.27	④182
小学校ニ至ル、当府高名ノ大校ナリ、～大抵貧民ノ子女ニテ、普通ノ学科ヲ教ヘ、出校ノ後ハ、各其家業ニツク、一切ノ費ハ、学校ニテ辨シ、家家ヨリ出スコトナシ、学費ハ市中ヨリノ醸金ナリ、		4.29	④190-191
一般ノ生徒ニ、悟解暗記ニ困ナラシムルコトアリ、之ヲ強テ課責スレハ、幼童ヲシテ学問ヲ厭棄スルノ心ヲ生セシメ、却テ終身ノ大害ヲ引出シ、～其向文ノ心ヲ塞クニ至ル、此注意ハ、普通教科ノ最モ要項ナリト、～西洋ニテ、小学普通ノ業ヲ授クルハ、皆平易浅近ノ教ニテ、男女貴賤ヲトハス、苟モ生命ヲ保続シ、人生ノ快樂ヲウクルニハ、一モ知ラサルニ付シ難キ科ノミ教ユルノミ、			④191-193
苑外ニ育嬰院ノ学校アリ、～コノ外當府ノ大学モ亦高名ナリ、	南日耳曼 ミュンチエン	5.6	④247
教育ハ、「サルジニヤ」一統ノ後、一千八百六十三年ニ、無丁字ノ男女、一千七百万ニ及ヘリ、政府意ヲ銳ニシテ、教育ノ方ヲツクシ、諸教会ヨリ没入ノ財産ヲ、学費ニ共シ、学政ヲ拡張シ、全国ニ三十三ヶ所ノ大師範学校ヲオキテ、教育ヲ獎勵シタリ、	以太利國略説	5.8	④271
首都「グラーツ」府、人口八万、大学校ヲオク、	奥地利國總説		④361
教育ハ、普魯士ニハ及バザレトモ、近代驟ニ進歩シ、殊ニ独逸地方ニハ、中小学校周備シテ、教育一般ニトキタリ、～職業ヲ務ムル時間ヲ妨ケザラシム、	首都「グラーツ」		④374-375
奥地利ノ政体ハ、～各州会ニテ地租、田野、学制、教法、救助、土木ノ事ニカヽル法ヲ商立ス、～行政官ハ内閣總裁、内務、教務、会計、商務、農務、兵務、司法ノ八省ヲ分ツ、	維納府總説	6.3	④391-392
奥地利ヲ奉ヒテ君トナシ、～行政官ハ、～教育～十長官ヲ分ツ、	匈加利國略説	6.15	④406
この用件実現のために、スイスは「内ニハ文教ヲ盛シニシテ、其自主ノ力ヲ暢達ス」という。確かに使節団は、米欧回覧の全過程で普通教育に関心を払っているが、とりわけ使節団がスイスやスウェーデンの小学校に注目しているのは、右のことの関連においてなのである。これらの国々では、教育は貴賤を問わず、語学・文典学・画学・数学・国史・地理・普通究理(物理)・唱歌～それ故にこそ学校教育の中で、	校注者の解説		④439-441

目録 第五編 欧羅巴大洲ノ部 下
ズリッキ (チューリッヒ)、ベロン (ベルン)、馬耳塞、馬德里府

原典記述	事項説明		記載頁
「ズリッキ」並ニ大小学校	第八十四卷		11
「ズリッキ」府ノ大学校ノ圖			
「ベロン」府ノ小学校	第八十六卷		12
教育及ヒ教門ノ弊	第八十八卷		13
人種風俗教育			14
農學ノ起り及ヒ農学校	第九十一卷		15

第五編 欧羅巴大洲列國ノ部 下 附リ帰航日程

維納万国博覧会、瑞士国、仏国、西班牙、歐羅巴、地中海、紅海、阿刺伯海、錫蘭島、榜葛剌海、支那海、香港、上海
「四編五編ニ至テハ、復ヲ略シ異ヲ択ミ、弥縫周備ニ意アリ、故ニ回覧ヲ略セル所ニモ、亦其国ノ特美ナキニハ非ス、」①13

原典記述	事項説明	「回覧実記」 日付・注	記載編頁 ⑤は編数
奥地利國ハ、自國ノ会ナレハ、出品ノ夥多シキ、数廊ヲ兼ヌ、～一区ニハ、礦山学校ヨリ、地質ニカヽル絵図ヲ出ス、	万国博覧会見聞ノ記、解説		⑤38-40
教育ハ独逸語ノ部分殊ニ盛ナリ、教育ノ渢クシテ、民ニ礼アリ学アリ、生業ニ勉強スルコト此国ニ遊学シテ、大学校ニ入ルモノ絶ヘス、	瑞士国ノ記、解説		⑤56
其學術教育ハ一般ニ行届キ～小学校ニ入ルモノ～大学校ノ誉レハ～中ニモ「ズリッキノ大学校」ハ～名アル学校ナリ。			⑤62

「ズリッキ」郡ハ、瑞士中ノ一大郡ニテ、～此府ハ学校ノ名譽最モ高シ、瑞士ニ常備兵ナシ、此府ニハ、兵学校アリテ、近郡ノ兵士ニ教フ、(瑞士「ズリッキ」府ノ大学校)	「ズリッキ」郡	1873.6.20	⑤64-67 ⑤65図版
小学校アリ、女学校アリ、～「ポルテクニク」教導校[ポリテクニック・スクール⑤56,61]ハ、府ノ東ニアリ、～此ハ百工ノ芸術ヲ教導スル所ニテ、高名ナル学校ナリ、～大学校ハ其南ニアリ、～医学校ハ其東ニアリ、ミナ欧洲各国ヨリ来リ学フト云、			
兵学校[軍ノ学校⑤65]ヲ設ク、	「ペロン」府	6.22	⑤74
小学校ニテ、歴史ヲ每人ニ授クル主意モ～	「ルセルン」府		⑤83
府ノ小学校ニ至ル、～私建ノ義校ニ至ル。	訪問	6.27	⑤93-95
此府ハ仏国ノ大都会ナレハ、博物館、博古館、画廊、病院、学校、貧院[博物館、歴史博物館、美術館、病院、学校、福祉施設⑤121]アリ、	仏国馬耳塞府解説	7.18	⑤122
学校ハ府内ニ甚タ多シ、「サンヘルナンソ」ト「サンアントレ」学校ノ外ハ、男女自由ニ入学ヲ許スモノ三ヶ所ニテ、学童四千ニ及フ、コノ外幼稚学校、大学校、商人学校、商法学校、算術、医術ノ諸学ミナ備ハル、	西班牙及葡萄牙国ノ略記、馬徳里府解説		⑤134
此国教育ノ大概ハ、千八百六十一年ノ記載ニ、全国ニ小学校ノ数二万二千六六十箇所ニテ、生徒ノ総数百0四万六千五百五十八人、即チ全人口ノ五十分ノ一ニ当ル、欧洲下劣ノ地位ナリ、中学校ハ五十八箇所ニテ、此教師ハ百五十七人ナリ、大学校ハ十二箇所ニ及フ、「サランマンカ」「バレンシア」「サラゴサ」「バレトリット」ナドニアルヲ、重ナル大校トス、			⑤140
国教ハ、～全国概シテ、羅馬「カドレイキ」教ナリ、～方今ハ僅ニ修道院ヲ保存セルノミニテ、住僧ミナ貧ニ、～下等ノ僧ハ、僅ニ教育ヲ受ルノミニテ、殆ト農工民ニ斎シ、～学校モ、寺院ノ管轄ヲ離レテ、内務省ニテ教育ヲ管掌ス、三十年來ハ、父母ニ脅迫ノ令ヲ行ヒタレトモ、實際ニ行ハルヽコト難ク、千八百六十一年ニ、公立学校一千七百八十八所、学生七万九千百七十二人アリ、人口三十六人ニ、一人ノ割ナリ、葡西ノ両国ハ、唯露国、及ヒ羅馬領ヲ除クノ外ハ、欧洲ニテ教育ノ劣レル国ナリ、中ニモ西国ハ、普通教育コソ偏カラサレトモ、大学校ハヤ、盛ナリ、葡国ハ大小学ヲ并セテ微ナリ、大学校ハ、只「コレンブラ」ニ一箇所アルノミ、	葡萄牙、解説		⑤145
総テ欧洲中ニ行ハルヽ、各種ノ言語ヲ大別スレハ、～抑仮音文字[表音文字⑤160]ニテ、～千差万別ヲ分チ、～故ニ欧洲ニテ、言語ノ権ヲ貴重スルノミナラス、語学ヲ重ンシ、小学校ヲ根本トス（「グラマル、スクール」ハ文典学ノ義ナリ[ヨーロッパにおける小学校的呼称であるグラマー・スクールというの、文法学校という意味である⑤150]）	欧羅巴洲政俗総論		⑤153-154
独逸ハ、勸農ノコトニ就テ、最モ欧洲中ニ超越ス、～從テ農学校ノ建立モ増加シタリ、農社ト農学トハ、互ニ親密ナル管係アルモノニテ、官立ノ学校ニテモ、私立農社ノ調査支配ヲウケシメ、又社員ノ見込ニテ、学校ノ改正ヲモナスコト普通ナリ、			⑤194
欧洲ニテ、学士ノ注意ヲ加ヘシハ、僅ニ百年以来ノコトナリ、一千七百七十一年、仏国ノ執政「ベルタン」氏ノ尽力ニテ、「コンピエーギュ」（地名）ニ、創メテ農学校ヲ立タリ、是ヲ開端トシ、有志ノ士、豪農ニ説テ、「グリタヨリーブラチカルキョン」（地名）ニ理論実験両備ノ農学校ヲ興シ、			⑤195
農学ノ設ケ種種アリ、独逸ニ於テハ、終年開校スル農業小学校アリ、只冬季農隙ノミ開校スルモアリ、夜間ニ農業ノ講義ヲ授クル夜学校アリ、～民口僅カニ百八十万ヲ有スルモ、農業小学百七十八、（夜学校六百九十七、夜会所百六十四ニ及ヒ、生徒二万、夜会ニ集ルモノ殆ト一人アリト云、	独逸		⑤196-197
仏国ニテ「フヘルムエコール」ト云ハ、農家ヲ以テ学校トナスノ謂ニテ、即チ耕作法ヲ、実地ニ教授スル小学校ナリ、十六歳以上ノ農丁ニ賃錢アタヘ、教員之ニ充分ノ教ヲ施シテ、耕作ヲナサシム、四十年前ヨリノ創立ニテ、現今四十二箇所ニ及ヒ、大ニ農業ノ進歩ニ功績アルモノナリ、又春秋冬ノ三期ニ、官ヨリ教師ヲ出シ、農事ヲ教授スルヲ、農業州学校トイフ、	仏国		
農業学校ハ、独逸ニ於テ百八十四アリ、其内八箇所ハ、大学校ノ権ヲ有シ、次十三箇所ハ、十二人ノ博士アルモノ、其次七十一箇所ハ、中学校ニテ、他ハ暗溝、灌水、培養法等、実業ノ学校ニテ、又種園養樹ノ大中学三十三箇所～	独逸		
奥地ニ於テモ、農学ノ注意厚シ、	奥地		
仏国ニハ、只三箇所ノ農業大学校アリ、	仏国		

独逸ハ最モ農ヲ重ンス、全国ニ二十五箇所ノ試験場アリ、～仏国ニハ只三箇所アリ、其目的ハ動植物ノ性質、天候地味ノ関係ニツキ、学校ニテ理上ヲ研窮發見セシコト、水土肥料ノ分析、及ヒ用法ヲ実地ニ試験シテ、其結果ヲ衆ニ報シテ弘ムルニアリ、英國ニ於テハ、勸農社ニ於テ試験研究ヲ遂ケ、	独逸、仏国、英國		
工業ハ、人民ノ生活ヲ便利ニスルノミナラス、造船術ハ、一大学科ヲ開キ、	歐羅巴洲工業 総論		⑤210

帰 路 航 程

「カルカタ」府ハ、～大学校ハ数所ニアリ、英学ヲ授ケル校アリ、「ヒンドス」(即チ印度ノ謂)教ヲ布キ、「モゴメット」ヲ布ク学校モアリ、「タルボイント」校、「エジャチフ」校ノ両校ハ、理科工芸ノ学中ニ於テ、桀越ナルモノトス、	榜葛刺海ノ記 「カルカタ」府	8.14	⑤297-299
申江ヲ下ル三英里余ニテ、造船場ニ至ル、～場ノ区域内ニ学校（現著者注、大久保1976に記載なし）アリ、英、米、獨三国ノ教師ヲ雇ヒ、生徒ヲ教育ス、	支那海航程ノ記、上海、造船場、訪問	9.4	⑤335
さらにベルンでは、学校や博物館、図書館などを見学し、	校注者解説		⑤357

資料2 教育関係施設訪問旅程

Reference mat. 2. The Iwakura Embassy's schedule for visiting to Educational Institutions.

凡 例

- 表において太枠内（漢字・片仮名）は岩倉使節団（「回覧実記」）本隊関連。
- 細枠内（漢字・平仮名）は上記1.を除いた文献によるもので、主に田中不二麿理事官、木戸孝允副使節たち関連。
- 日付は、陰暦・陽暦変換プログラム（補足1）で陽暦にした。「明治～」、または「漢数字」は陰暦である。「回覧実記」では日付変更線を考慮して一日重複させているので変換プログラムをそのまま利用した。原著で現地日付のものは記述のままにしたので、表示が一日違う場合がある。
- 固有名詞で違った読み方のものは、原著者の読みのままにしてある。

1871/12/23 (明治4/11/12) 横浜発（文部大丞田中不二麿は理事官として岩倉使節団と共に横浜発）。
1872/1/22サンフランシスコ、「ランマン女学校」「リンコールン」小学校。
1872/1/22午前、公使と領事館の案内で大使一行（恐らく田中らを含めて）小学校3校、ランマン（または「デンマン」）女学校・某男子校・「リーコールン」共学校(A,B)（補足8）。1/23（十二月十四日）デンマン中学校（『回覧実記』では「ランマン」女学校とある）を見学。～次にリンカーン中学校を訪れた。～アメリカの公立小、中学校の制度について調査を命ぜられた文部大丞田中不二麿ほか五、六名が先週の金曜日に、ブッシュ街のシティ・アカデミイ（カレッジ）の校長J・K・ウイルソン教授の案内で、今挙げた中学校のほか、コスモポリタン・ボーイズ高校、シティ・アカデミイを訪れたとの記事が「サンフランシスコ・クロニクル」(1872・1・23付)に見られる(T49-51)。
1/28「オ、クランド」ノ学校、随行ノ官員ヲ派シテミセシム。
1/28大使随行の官員（田中らのことか）オークランド市の小学校・兵学私校・盲啞院・大学校(A)。1/29（十二月二十日）～文部大丞田中不二麿とその部下らが視察に赴いたものか。まずオークランドの小学校を訪れた～。次いで訪れたのは、私立のミリタリースクールである。～次に～、山腹にある盲啞学校であった。～最後に訪れたのは、町の中にある大学（「オークランド大学」？）である(T61)。
2/7ソルトレーク、「モンティンホール」学校、「モルガン」商学校2/7「モンティンホール」普通学校・「モルガン」商業学校(A,B)
2/26シカゴ、小学校二ヶ所。
2/26大使一行シカゴ市中を見学し、その際小学校2校。ただし木戸は別の行動をとり、大学を訪ね天文台等を見、学長の案内で学内を巡る(A,B)（補足9）。3/8当時アンドーヴァー神学校の学生だった新島襄、ワシントンで岩倉使節団の田中不二麿文部理事官と会い、アメリカの教育制度調査への協力を要請されて、承諾(O)。3/9田中は通訳および高官と教育局を訪れ、合衆国教育の起源・発展について情報を得、さらにワシントン区内の教育機関の見学を行った。(小林p.86注) 同日、田中・二人の隨員（長與・中島か）・新島は一私立女学校を訪問。3/14田中一行（田中、中島永元、内村良蔵、新島、または富田命保が通訳）、白人向けのフランクリン・スクールを視察。3/15（二月七日）新島らは～教育局長官イートン氏の案内で私立学校を訪問(T132)。3/15イートンの案内で私立女学校を訪問(O)。3/15～4/6フィラデルフィアよりの招待状を受け、理事官肥田為良ほか8名が60ヶ所以上公共施設、出版、学校、教会、製鉄、造船工場などを視察(Go)。
(3/20全権委任状下付のため大久保副使3/21伊藤副使、日本へ出発、5/1日本着)。
3/21木戸・田中・4人の隨員・新島ら、ワシントンのColumbia College訪問(B,E)、コロンビア・カレッジ（現ジョージ・ワシントン大学）訪問（木戸、田中、新島、富田ほか3人の使節団員）(O)。3/22（二月十四日）木戸副使と属僚四名、新島らは、“ワシントン・カレッジ”訪問(T136)。3/23木戸（田中も同行か？）、イートン・ウイルソンの案内で「罪童学校」訪問(B)（補足10）。

3/24（ワシントンにて）更ニ黒人学校（補足11）。

3/24（二月十六日）木戸は～罪童学校”（「ジョージ・ワシントン少年院」を見学（T138）。田中は新島に欧洲への同行を求め、了解される（O）。4/1ワシントンを離れた田中と新島はペンシルバニア州のハリスバーグ、フィラデルフィアの孤児向けの学校、刑務所、養老院、小・中・高校、障害者施設を訪問（O）。4/5田中と新島インディペンデンス・ホール訪問（O）。4/5（二月二八日）大使一行はデ・ロング公使の案内で市内の学校や諸器械などを見学したのち、ミッションスクール（女子生徒のみ数百名）訪問。同日田中らが公共教育局招待で公立学校をいくつか訪問。その中にはワイオミング校、女子高校、師範学校、中央高校などが含まれ、～（ワシントンの「ザ・デイリーモーニング・クロニクル」1872・4・6付）（T143）。4/5フィラデルフィアでGerard College。4/6救貧院など。4/8小学校・中学校・女子師範学校（F）。4/11～2週間田中と新島は、母校のフィリップス・アカデミー、アンドーヴァー神学校、アボット女学校訪問。アーモストへ移り、新島の恩師シーリー教授宅に滞在。アーモスト大学、マサチュセッツ農科大学、ホリヨーク女子セミナリー、聾哑学校を見学（O）。4/13ボストンにて、Central Churchの日曜学校。4/14 Harverd College、4/15・16市の公立学校（F）。

4/17「スミソニヤン」学校ヨリ招待状来ル、山口副使之ニ赴ク～諸国ニ建タル学校ノーナリ、～中央ニ学校アリ、～府中屈指ノ大校ナリ

4/18アンドバーを訪れ、Phillips Academy, Theological Seminary (F)。4/24アマーストにて、Amherst College のSeeleye教授とState Agricultural Collegeの学長W. S. Clark の案内でHolyoke Seminary と農科大学。4/25アマースト大学。26日、聾哑学校Northampton Institute (E, F)。4/27二人はニュー・ヘブンに移り、イェール大学、シェフィールド科学学校、聾哑学校、高校、師範学校、州立感化院、精神病院訪問（O）。4/29ニュー・ヘブンにて、Yale College, Library, Cabinets, History and Art Gallery, Sheffield Scientific School。4/30聾哑学校、Brown School（ハイ・スクール）、ニューブリテンの州立師範学校、感化院。5/2三つの公立学校（E, F）。5/3（三月二十七日）大使、副使以下の日本人二十名余は、國務長官フィッシュ、海軍長官ローブソンらと共にアナポリスにある海軍兵学校（1845年開校）を見学（ニューヨーク・タイムズ1872・5・5付）（T158）。5/3田中、新島は、ニューヨークへ移動。～小・中学校、コロンビア大学～、刑務所など見学（O）。

5/4一行スヘテ、～アナポリスニ至ル、～（海軍）学校ニ入ル。

5/7ニューヨークにて、初等中学校・City College。5/8感化院・職業学校（F）。5/11まで滞在し、岩倉使節団と分かれ、ジャージーシティより汽船Algeriaに乗船して英國に向う（E）。5/21リバプール着（F）。5/21二人は英國のリヴァプールに上陸。マンチェスターに向かう。その後、二人は、カーライル、グラスゴーエジンバラを順に巡り、国教会系や非国教会系の普通学校、エジンバラ大学、植物園、実業学校などを訪問（O）。5/27グラスゴーに来り、Established Church Normal School を見学。5/28Free Church Normal School (F)。5/29エジンバラに着き、5/30 Edinburgh University。5/31二つの中学校Edinburgh Academy Collegiate Institute。6/2 U. P. Church's Sunday School。6/3 Mory House Normal School Industrial School (F)。6/5田中、新島は、ロンドン着。～7/16までの間に、キングス・カレッジ、公・私立学校、盲哑学校、精神障害者看護施設、孤児院、大英博物館、ロンドン塔、グリニッジ天文台、オックスフォード・ケンブリッジ大学訪問（O）。

6/10-11（ウェストポイント陸軍）学校ニ至ル。

6/11（五月六日）、ウェスト・ポイントに着く。陸軍士官学校（1802年開校）の所在地～。岩倉一行のウェスト・ポイント訪問については、「ニューヨーク・タイムズ（1872・6・12付）」が比較的くわしく報じている（T172-177）。6/13 St. Morll's Training College、6/17 Home and Colonial School on Gray's Inn Road・King's College、6/19 University College、6/20 School of Art and Science in South Kensington (F) .6/19 学校を見るパーマスクールと云頑児を教育する学校と云（K190）。

（6/22大久保・伊藤、再び米国へ出発）。

6/27盲学校・少年院・救貧院、6/28 Curzon School、7/4聾哑学校、7/5養護院、7/7棄児院、7/8オックスフォード大学、7/9ケンブリッジ大学、7/10農村学校（F）。7/16ロンドンをたちパリーに（F）。7/16田中、新島はパリー着、今村和郎と合流。学校は夏休みのため数日後スイスへ向かう。スイスでは、ジュネーブ、ベルン、チューリッヒを順に訪れ、公立女子学院、小学校、図書館、博物館、医学校、家畜病院、連邦議会、州議会、盲哑学校、大学など見学。新島は一人でシャモニーの旅（O）。7/20 パリー出発。

（7/22朝、大久保・伊藤ワシントン帰着、午後、条約改正交渉打ち切り）。

7/24 ジュネーブ、Academy と女学校。26日、小学校（F）。7/29ベルンにて、物理学校・Gymnasium (F)。

7/29ヒラデルヒヤ「デラルト、コルレーチ」大学校、7/31ニューヨーク少年教会堂（略学校ニ類ス）。

8/1チューリッヒを訪れ、8/2大学、工科大学、3日、盲哑学校（F）。

8/2ボストン学校（名称不明）8/6英國ノ「キュナルト」会社ノ郵船、「オリンハス」号ノ汽船ニ乗込みリ、～8/16クインスタウン着。

8/6新島はベルリンに到着。田中・今村と合流、近藤昌綱も加わる。夏休みのため、ロシアの首都サンクトペテルブルグへ移動。巨大な図書館、大規模な孤児院訪問（O）。8/9セントピータースブルグ着。8/12棄児院。8/13美術館見学（F）, そのほか大学・師範学校見学（E）。8/16ベルリンにもどる（F）。8/16田中一行はベルリンに戻ったが、応対予定の文部大臣側の準備がまったく整っていなかったので、オランダに行く。オランダでは、ハーグ、ライデン、アムステルダムを順に巡り、公立学校、幼稚園、大学、王宮、シーボルト博物館等を見学（O）。8/19ハーグ、小学校。8/23精薄児学校（F）。8/26ライデンに移り、数日滞在して大学・女学校。アムステルダムに行き、職業学校その他種々の学校（E, F）。8/29軍艦の水夫学校に至る、～14歳より16歳までのものを入校（K220）、9/2ハンブルグを経て、コペンハーゲンに来る。（E）、学校（D）。9/2デンマークのコペンハーゲン。市内の学校、見本市を見学。数日後ベルリンに戻り、大学などの諸学校を見学。新島は同月上旬に「理事功程」の草稿執筆着手（O）、9/11学校に至る（K230）。

9/17（ロンドン）府中ノ小学校ヲ一覧ス、10/2船学校ヲ見回ル～凡四艘アリ、10/5牢獄ニ至ル、～勉強シテ10/8「オウン」学校ニ至ル、10/14大学校＜ユニヴァルシチーニ至ル。

9/21ブライトン之学校ヘ（K237）、10/2四艘の学校船に至る（K243）、10/8ホリコートに至る～又学校（K249）。

10/17木戸はエジンバラに止まり、商業学校を訪問（IR ②89）10/18 メルチェントコンペニー学校に至る此学校は皆女也（K258）。

10/23船学校、10/25半日ハ場～半日ハ校、10/26学校（孤児院）ニ至ル。
10/25半日学校に入半日職場に（K263）、10/26孤児院に至る（K265）、11月、田中は一時、ベルリンで合流した長与専齋、恐らく今村と共に、当時使節団本隊が滞在していたイギリスへ渡り、医学教師雇用契約に関して木戸と相談している。田中はベルリンに戻り、長与はアムステルダムに移り、今村はロンドンに留まった。その間、新島はホテルでヨーロッパ各国の学校規則や報告書の翻訳に没頭（O）。
11/4製造場ニ至ル、～場内ニ学校ヲ設ケ～
12/16ロンドン発、パリ着（IR③101）。
1873年1月1日：改暦：明治5年12月3日を明治6年1日とし、以後陽暦となる。
1/3「アンファンド、ツルウェー」ニ至ル、棄児院ナリ～
1/3田中は新島とわかれ、ベルリンを出発、ウィン・ローマを経てパリに向かう（E,D）。
1/15陸軍学校ヲ回覧ス、1/20建築学校、礪山学校ニ至リ、1/25盲院ニ至ル。
1/20道路橋梁学校に至る（K309）、1/23喉院へ至る（K311）、1/25盲院へ再至り（K312）、1/28パリにて、木戸・田中・今村は中学校同行し（補足12）。1/30田中・長與（恐らく中島・内村らも）パリを出発、2/1マルセーユよりスエズを経由で帰国途につく。
2/17～3/9パリ、ブリュッセル、ハーグ、ベルリン（IR④123、⑤153）3/24田中は日本に帰着（B, G）。
3/23ベルリン、小学校ニ至ル～大学校ニ至ル、3/28ベルリン発ロシアへ（岩倉、木戸、伊藤、山口、久米）（大久保帰途）。
3/30ロシア、セントペートルボルク着（IR⑥173）。
4/9育嬰院ニ至ル、聾啞院モ、4/11医学校附属ノ解剖寮ニ至ル、4/14セントペートルボルク発、（4/16木戸帰途）、4/18～23コペンハーゲン着、4/27兵学校ニ至リ、4/29小学校ニ至ル。
4/9棄児院に至る～喉院に至る（K344-5）、4/24ストックホルム着（IR⑦187）、5/1-11ハンブルグ、ミュンヘン、フローレンス、ローマ（IR⑧205）（5/26大久保利通帰国）。
5/27ベニス着、6/3～7/18、ウィーン、スイス、ベロン、6/27府ノ小学校ニ至ル、6/29ジュネーブ、リヨン、マルセーユ。（7/20岩倉大使帰途につく）。
（7/23木戸帰国）ナポリ、ポートサイド、スエズ、アデン、ガール、シンガポール、サイゴン、香港、上海（IR⑨p. 223）。
9/4申江ヲ下ル三英里余ニテ、造船場ニ至ル、～場ノ区域内ニ学校アリ。 (長崎、神戸を経て、9/13岩倉大使横浜着)。
9/8「理事功程」米国の部2巻を田中不二磨が太政大臣三條実美に上申、引き続き英國の部1巻上申。12月、上述三巻の和装本が文部省より出版 1875（明治89年1-9月、巻之四～十五、11/4全15巻、（明治10年）/6一冊の活版本として再版。
1878（明治11年）/12（奥付は10月）「米欧回覧実記」刊行御用刊行所博聞社。

Compilation of the educational terms in "Bei-O Kairan Jikki*" —Visit of the Iwakura Mission to educational institutions—

Tsutomu Murase
Kazutoshi Tanaka

The Iwakura Mission extraordinary and plenipotentiary was dispatched to the USA and Europe to make a tour of inspection for a year and 10 months (1871-73). The Mission was first proposed by Guido Verbeck, a Dutch missionary, and was named after and headed by Tomomi Iwakura as ambassador, assisted by four vice-ambassadors.

Their purpose was three-fold: 1) To visit signatory nations concluded in the days of the Tokugawa Shogunate. 2) To renegotiate the unequal treaties with the USA and others. 3) To gather information on education, technology, culture and military, social and economic structures from Western countries in order to effect the modernization of Japan.

The members were administrators, scholars and about 60 students, over 100 people in all. They visited the USA and 12 European countries, making thorough investigations into each country's politics, military affairs, trade and industry, education and culture. On their homeward journey, they made a brief visit to 7 spots. The Mission were impressed by the modernization in Western countries, which later made them take the initiative in modernizing Japan.

Kunitake Kume, a historian and official diarist, kept a detailed record of all events and impressions. After his return to Japan, he compiled and published the observation in "the Bei-O Kairan Jikki" in five volumes. The Jikki has encyclopedia knowledge; the terms of science and technology, and of agricultural technology are already classified and compiled.

In this paper the terms relating to education were compiled. Moreover, the educational institutions visited by the Mission during the journey were classified by countries and schools. The following results were obtained: the Mission visited many and various educational institutions.

- 1) Most of them were general schools: grammar schools, junior and senior high schools, and universities.
- 2) Vocational, technical and business schools.
- 3) Various institutions for handicapped people.
- 4) Theological schools.
- 5) Military schools etc.

Statistically most of the institutions were in the U.S.A. and Britain in proportion to the length of the Mission's stay, though the data used in this paper, especially those for Europe, may not cover all the institutions visited by them. The results in this paper, however, clarify qualitatively and quantitatively the Mission's deep interests in education in Western countries, which later made an important contribution to the educational administration in Japan.

* See "Graham Healey and Chushichi Tsuzuki" (2002) in references for English title of "Bei-O Kairan Jikki".